

『阿弥陀経』が与えた法然上人への影響

中御門敬教

一、浄土思想と『阿弥陀経』

阿弥陀仏や極楽浄土を主題とする浄土思想の起源については、インド内部起源説とインド外部起源説とに大別される。従来この起源問題については、議論が重ねられてきたが、現時点でも未決である。その思想はインド内部と外部との、種々の要素の混淆によって興起した可能性も否定できない。

こうした浄土思想をよく伝える仏典の一つに、本研究で扱う『阿弥陀経』がある。『阿弥陀経』は、インド仏教圏に成立地が措定される、代表的な浄土経典である。内容を示すものとして、サンスクリット本、チベット訳、二本の漢訳が現存する。また重訳には、漢訳の鳩摩羅什訳に基づくチベット訳、同じくウイグル語訳、同じく西海語訳、同じく満州語訳の四訳、そしてチベット訳に基づくモンゴル語訳が報告されている（藤田 二〇〇七、一〇七頁以下）。我が国においては、特にこれらの中の鳩摩羅什訳『阿弥陀経』が「浄土三部経」の一つに数えられ、浄土系諸宗派における代表的な読誦経典として周知され、今なお大きな影響力を有している。

その成立地については、インド圏内である点に異説は確認されない。

またその伝播については、その認知度は東アジアの漢語仏教圏において群を抜く。対して、インド仏教圏においては事情が少し複雑である。当経や『無量寿経』の経文は、認知度の指標ともなる論書への引用が確認されないのである。その点について、以下に試みとして私見を述べる。論書は一般的な教理を扱うので、所謂「総（総体的）」の立場である。慈悲の方便に特化した「別（個別的）」の立場の当経とは、立場が異なるので上記の事情が生じたと推測する。必ずしも知名度が、その原因ではなかったと考える。事実、信仰面への影響について確認すると、当経が説く仏名（阿弥陀仏）と国土名（極楽世界）が、他の諸仏典に散見される点から、当経の教説は相当に周知されていた（藤田 一九七〇、一四一頁以下）。ちなみにこの信仰面での救済性の定着は、後の時代の浄土教の密教化に繋がるものである。

当経の別名としては以下がある。鳩摩羅什訳には無量寿経、小経、小本、小無量寿経、四紙阿弥陀経、四紙経がある。玄奘訳には小無量寿経、称讚浄土仏撰受経がある（佛教学総合研究所 二〇一一、五頁）。曇鸞『浄土論註』では『無量寿経』を「王舎城で説かれた無量寿経」、「阿弥陀経」を「舎衛国で説かれた無量寿経」と呼ぶ。サンスクリット本は『無量寿経』と同様に *Sukhāvativyūha* であるが、チベット訳では『無量寿経』は *Phags pa 'Od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen poi mdo*（聖なる無量光の莊嚴と名付けられた大乘経典）、『阿弥陀経』は *Phags pa bDe ba can gyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen poi mdo*（聖なる極樂の莊嚴と名付けられた大乘経典）とあるように訳し分けされている。

当経の全体構成は、前半では主に極楽浄土の莊嚴と念仏往生について説かれ、後半（二六方段）では六方（東南西北下上）世界の諸仏による、経説への賞讃と信仰の奨励が説かれる。末尾では、浄土の教えが難信の法である点が

強調される。

次に当経の性格を、浄土宗の宗祖である法然上人（長承二年（一一三三）—建暦二年（一一二二）、以下尊称略）の教説との関係からも概説する。

（一）『無量寿経』との関係

『阿弥陀経』は、『無量寿経』の基本構造である「誓願とその成就」について触れない。しかし内容的には『無量寿経』と矛盾する点は見当たらない。ただし両者の前後関係については未決である。この前後関係の問題は、当経の成立年時にも影響を与えるものである。

（二）俱会一処

成仏への一過程である極楽世界での「俱会一処」が強調される点から、輪廻世界への共感や寄り添いの姿勢が確認される。この立場は、極楽世界での「畜生道」（鳥類）の姿にも反映している。そこでの鳥類は、三悪趣の一つである畜生道の存在ではない。鳥類のまま、極楽世界での荘嚴の一つになっている。そのことは鳥類が阿弥陀仏の変化であると同時に、そうした形で「畜生道」への慈悲が暗示されている（藤仲、中御門 二〇一八、三六〇頁）。

（三）臨終来迎

漢訳『阿弥陀経』の異訳の一つである、永徽元年（六五〇）に翻訳された玄奘訳『称讃浄土仏撰受経』には、極楽世界の聖衆による慈悲の臨終来迎をもって、臨終者に対する死の恐怖の緩和が説かれる。ちなみに法然「大胡太郎へ遣わすご返事」の中には、関係する以下の法語が残されている。いわゆる「慈悲加祐」である。

「称讃浄土教に云く、「仏、慈悲をもて加え祐けて、心をして乱らしめ給わず」と説かれて候えば、ただの時によくよく申しおきたる念仏によりて、臨終に必ず仏は来迎し給うべし。仏の来迎し給うを見たてまつりて、行者、正念

に住すと申す義にて候。」(総本山知恩院布教師会 二〇一〇、一五五頁)

(四) 多善根と小善根の問題

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』には、「舍利弗、少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず」と説かれる(聖典一・三二八)。釈尊が対告衆の舍利弗に対して、極楽世界には少しばかりの善根では往生できないと説いた箇所である。法然是善導(六一三―六八二)『法事讃』の解釈を採用しつつ、阿弥陀仏が選取した念仏こそが、極楽往生を保証する多善根を生むものであり、選捨された諸行は、念仏と対比して少善根を生むものとする(浄土宗 二〇二六、一〇二七頁以下)。この問題については岸(一九八八)、兼岩(二〇〇二)、林田(二〇〇二)、同(二〇〇四)、南(二〇一七)などによって研究が蓄積されている。

(五) 諸仏証誠——選択証誠との関係——

「当経の後半に出る、所謂「六方段」には、六方諸仏による念仏者への護念が強調される。念仏がもたらす現世利益の根拠となる箇所である。ちなみに法然はこの箇所に注目して、「八種選択義」の一つである「選択証誠」を論じた。

二、法然著『阿弥陀経釈』に基づく鳩摩羅什訳『阿弥陀経』の構成と内容

浄土宗の宗祖である法然は、弘始四年(四〇二)に翻訳された当経の鳩摩羅什訳を、曹魏天竺三蔵康僧鎧訳『无量寿経』、宋元嘉中曇良耶舍訳『観無量寿経』と共に「浄土三部経」の一つ、あるいはそこに婆薮般頭菩薩(〇世

親／天親）造、後魏菩提流支訳『無量寿経優波提舍願生偈（往生論）を加えた「三経一論」の一つに挙げる（淨全七・五／聖典三・八）。こうした宗祖の聖典観に基づいて、古来、浄土宗では当経を対象とした多くの研鑽が積まれてきた。ここで、法然による『阿弥陀経』観を同『阿弥陀経釈』を手がかりにして確認する。⁽¹⁾『阿弥陀経釈』には別名として、小経釈、阿弥陀経私記、小経私記がある。「東大寺講説」を構成する一つである。角野玄樹氏は、本釈の特徴として「特に少善根の文や、六方諸仏証誠の文などの、念仏の要点に力点を置いていようである。また、本書は所々に源信の『阿弥陀経略記』の影響が見られる。」と述べる（佛敎大学総合研究所 二〇一一、二四八頁）。

この釈は、系統の異なる以下の二系統（一）（二）が存在する。

（一）①寛永九年版（二六三二）

（一）②承応三年版（二六五四）

（二）①古本『漢語灯録』所収本（二六九八）別名「恵空本」

大谷本（大谷大学所蔵）、善照寺本（善照寺所蔵）の二本が存在する。

（二）②新本『漢語灯録』所収本 正徳五年版（二七一五）別名「義山本」

この二系統について、例えば『昭法全』所収の「十、阿弥陀経釈」（寛永九年版を底本にして、承応三年版を対校本としたもの）注記には、「本書は古本漢灯に「私云此一卷与現行印本号三経釈別本也」トスル別本ニ当ル古本漢灯所収本ト本釈トヲ校合スルニ相違アリ、依テ別出ス。」とあるように、古くから、二系統の存在が考慮されてきた（『昭法全』一四七頁）。

両系統の構造について、科段から整理すると以下の通りである（佛敎大学総合研究所（二〇一一、二四八頁））。

(一) 寛永版系統…来意、専雜、釈名、入門解釈

(二) 善照寺本 …弁所依経、重釈二行、経来意、釈名、入門解釈

両系統については、同じ名称ではあるが思想的に重要な相違点も見られるため、法然の思想的変遷を探る上で詳細な議論が行われてきた。『阿弥陀経釈』の原意や原初形態の解明に繋がる、古層部分の復元に関する議論である。主として「テキストの新層古層」、そして「テキストの編集（該当箇所への挿入）」について考察されてきたが現時点でも未決である。角野玄樹氏は「本書は文献的に他の『無量寿経釈』・『観無量寿経釈』とともに問題がある。すなわち、これら3書は、『選択集』の文が、後世になって流入したと今岡達音は主張する。更に岸一英は、『広本選択集』以外の文であっても、付加された新層の部分があることを示唆する。したがって、それら3書の原意を知るには、新層を除き、古層に注視する必要がある」と述べる（佛教大学総合研究所 二〇一一、二四八頁）。この文献学的な問題は、法然研究の各分野に大きな影響を与えることから、先行する源信『阿弥陀経略記』をも視座に含めた、総合的研究による説明が俟たれている。またその一方で新出資料の出現も望まれている。なお『阿弥陀経釈』に関する先行研究の紹介、そして複雑な諸議論の詳細な整理については、袖山榮輝「『阿弥陀経釈』解説と諸問題」（袖山 二〇〇五所収）が有益である。この事項に関心のある方には一読を勧めたい。

以下に『阿弥陀経釈』「寛永九年版」に基づいて、『阿弥陀経』「正宗分」を中心とした科段の記述（昭法全二四七／聖典一・三九二）²⁾を挙げる。この科段の提示によって、法然による『阿弥陀経』観の全体像が理解できる。各項目の内容については、個別に注記に示す。

【正宗分】「極樂依正」

依報⁽³⁾…七重羅網⁽⁴⁾(浄全一・五二・八)

依報…七重行樹⁽⁵⁾(浄全一・五二・八)

依報…七宝華池⁽⁶⁾(浄全一・五二・九)

依報…黄金大地⁽⁷⁾(浄全一・五二・九)

正報⁽⁸⁾…仏⁽⁹⁾(浄全一・五三・九)

正報…菩薩⁽¹⁰⁾(浄全一・五三・十一)

正報…声聞⁽¹¹⁾(浄全一・五三・十一)

正報…衆生⁽¹²⁾(浄全一・五三・十三)

【正宗分】「念仏往生」

念仏往生…修因；発願⁽¹³⁾(浄全一・五三・十四)

念仏往生…修因；念仏⁽¹⁴⁾(浄全一・五四・一)

念仏往生…感果；聖衆来迎(浄全一・五四・二)

念仏往生…感果；行者往生

引証勸進⁽¹⁵⁾…来意⁽¹⁶⁾

引証勸進…正引証勸発⁽¹⁷⁾；以自証知見勸進⁽¹⁸⁾(浄全一・五四・三)

引証勸進…正引証勸発；引他仏証勸進⁽¹⁹⁾(浄全一・五四・四)

引証勸進…正引証勸発；示現当利益勸進⁽²⁰⁾(浄全一・五五・七)

引証勸進…正引証勸発；拳我為諸仏所讚勸進(浄全一・五五・十二)

引証勸進…正引証勸發；総括勸進（浄全一・五五・十四）

三、法然による『阿弥陀経』への言及

以下に坪井（二〇〇五）に基づいて、法然による『阿弥陀経』への主な言及箇所を紹介する。坪井氏は、『阿弥陀経』の内容を細分類した「出世本懐」「一日七日」「選択」「証誠」「脱文」「読誦」の点から法然法語を整理している。ここに含まれない言及例の詳細については、同本末尾「昭和新修法然上人全集索引（Ⅱ書名）」の【阿弥陀経（阿弥陀経、アマタ経）】の項目を御参照頂きたい。

○出世本懐

「阿弥陀経等は浄土門ノ出世の本懐ナリ。」（『十七條御法語』（昭法全四六八））

*その他、関係する法語として『阿弥陀経の大意をのべ給ひける御詞』（昭法全四八七）が挙がる。

○一日七日

「この経に一日七日といへるを、只一日七日に限と意得るは僻事なり。……上尽一形下至一日一時一念等……阿弥陀経の一日七日も、又如此意得べき也。」（『阿弥陀経の大意をのべ給ひける御詞』（昭法全四八七）（取意））

○選択

「阿弥陀経の中に一選択あり、いわゆる選択証誠なり。〔阿弥陀経中有一選択所謂選択証誠也〕」（『阿弥陀経釈』（昭法全一四四、一五七）、『選択集』（昭法全三四七））

○証誠

「証誠とは六方諸仏の選択なり。〔証誠者六方恒沙諸仏之選択也〕」（『阿弥陀経釈』（昭法全一四五、一五七）、「選択集」（昭法全三四七））

「六方如来の証誠を説とは。かの六方の諸仏の証誠は、ただこの一経のみに限って証誠したまうに似たりと雖も、実を以て案するに、この経に限らず、惣じて念仏往生を証誠するなり。〔六方如来証誠説。彼六方諸仏証誠雖似但限此一経而証誠以実案者不限此経惣証誠念仏往生也〕」（『逆修説法』（昭法全二四五、二九六（取意）、「法然聖人御説法事」（昭法全二〇六））

*その他、関係する法語として『三部経釈』（昭法全一六三）、「法然聖人御説法事」（昭法全二〇六）、「逆修説法」（昭法全二五五）、「逆修説法」（昭法全二五五、二九六（趣意））、「念仏大意」（昭法全四〇六）、「阿弥陀経釈」（昭法全一四一、一五四）が挙がる。

○脱文（襄陽の『石刻阿弥陀経』に出る「一心不乱」以下の二十一文字）

「阿弥陀経の脱文（二十一字：専持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁）」（『法然聖人御説法事』（昭法全二〇五）、「逆修説法」（昭法全二五四、二九六）、「阿弥陀経釈」（昭法全一四九）、「選択集」（昭法全三四四）

○読誦

「源空も念仏のほかに、毎日に阿弥陀経を三巻よみ候き。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。」（『隆寛律師伝説の詞』（昭法全四六四））

小 結

今回は主に先行研究に基づいて、1、浄土思想と『阿弥陀経』、2、法然著『阿弥陀経釈』に基づく鳩摩羅什訳『阿弥陀経』の構成と内容、3、法然による『阿弥陀経』への言及、という3つの点から、法然による『阿弥陀経』を観を巡る現状と課題を整理した。『阿弥陀経』は小部な経典であるが、「浄土三部経」の1つであることから、今後一層の研究や研鑽が期待され、俟たれるものである。

註

- (1) 以下の考察にあたって、大橋（一九八九 寛永九年版を底本とした現代語訳）、袖山（二〇〇五 善照寺本を底本とした現代語訳）から大いに裨益を受けた。なお本文に挙げた(一)系統が『昭法全』（二四七頁以下）の「十阿弥陀経釈」に対応し、同じく(二)系統が『昭法全』（二一九頁以下）の「九、阿弥陀経釈」に対応する。
- (2) 以下、本文中における、参考文献と出典先と引用との掲載方法をはじめとする表記一式については、浄土宗（二〇一六）が出す「新纂浄土宗大辞典 凡例」に倣う。なお本稿執筆にあたり、分量の関係で一個々に断らないが、上述辞典に執筆された諸氏の記述を大いに参考にさせて頂いた。なお『阿弥陀経』の構成と内容についてサンスクリット本、チベット訳、鳩摩羅什訳はほぼ一致する。ただし玄奘訳に出る、①六方段を十方段とする点、②「慈悲」の語を説く点、③特定の異民族である「蔑辰車 (mleccha)」を説く点、これら三点は他の諸本に無い特徴である（西村 二〇一一、七五頁以下）。
- (3) 「依報」とは、「有情の生存のよりどころとなる山川草木などの外的な環境」の意味（浄土宗 二〇一六、一三九頁）。

- (4) 依報の一例である「七重羅網」とは、七重のかけあみの意味（浄土宗 二〇一六、一四九三頁）。
- (5) 依報の一例である「七重行樹」とは、七重の並木の意味。
- (6) 依報の一例である「七宝華池」とは、七宝（金・銀・瑠璃・玻璃・珊瑚・瑪瑙・磤磤）から成る蓮池の意味。
- (7) 依報の一例である「黄金大地」とは、黄金から成る大地の意味。
- (8) 「正報」とは、「自分自身の過去の業の報いとしてまさしく得られた有情の身心」の意味（浄土宗 二〇一六、一三九頁）。
- (9) 正報の一例である「阿弥陀仏」が挙がる。
- (10) 正報の一例である「無数の一生補処」の菩薩衆が挙がる。
- (11) 正報の一例である「無数の声聞衆」が挙がる。
- (12) 正報の一例である「無数の不退転の衆生」が挙がる。
- (13) 「発願」とは、極樂往生を願うことの意味。
- (14) この「念仏」は、「念仏往生」も含意する。具体的には、「若一日乃至七日」にわたる念仏（執持名号）によって極樂往生を目指すこと。
- (15) 「引証勸進」とは、「浄土に往生できることを信じさせるために、世尊自らのさとり、その他の仏のさとり、そして利益が得られることなどを引いて、念仏往生を勧めること」の意味（中村 一九八三、六七頁）
- (16) 「来意」は、「由来。ある事柄による由来。經典注釈では、由来を説明するのを一つの型とする」の意味（石田 二〇一一、一〇九二頁）。
- (17) 「正引証勸発」とは、教証を提示して、念仏往生を勧めること。『阿弥陀経釈』はこれに五種類有るとする。
- (18) 「以自証知見勸進」とは、釈尊が念仏往生の道理を肯首した、その証明に基づいて、衆生に念仏往生を勧めること。
- (19) 「引他仏証勸進」とは、六方諸仏が念仏往生の道理を肯首した、その証明に基づいて、衆生に念仏往生を勧めること。

こと。いわゆる「六方段」の箇所。

(20) 「示現当利益勸進とは、現世利益（諸仏による護念）と、来世利益（極楽への往生）とを示して勧めること。

主要参考文献（紙数の関係上、本稿で引用した研究を中心に挙げる）

石上善應監修、袖山榮輝訳註

・『傍訳 阿弥陀経积』（四季社、二〇〇五）

大橋俊雄

・『阿弥陀経积』（『法然全集』一所収、春秋社、一九八九）

小野田俊蔵

・『藏訳阿弥陀経校合表』（『香川孝雄博士古稀記念論集 佛教学浄土学研究』永田文昌堂、二〇〇一）

香川孝雄

・『浄土教の成立史的研究』（山喜房仏書林、一九九三）

梶山雄一著、吹田隆道編

・『浄土の思想』（『梶山雄一著作集』六、春秋社、二〇一三）

兼岩和宏

『選択集』と『阿弥陀経积』——『選択集』第十三章の成立をめぐる——（『印度学仏教学研究』五〇—一、二〇〇一）

岸一英

・『逆修説法』と『三部経积』（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』同朋舎、一九八八）

・『阿弥陀経积』古層の復元——『三部経积』の研究（五）——（『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学佛教学論叢』

一、山喜房佛書林、二〇〇四）

齋藤蒙光

・『法然の阿弥陀仏解釈——『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性——』（『共生文化研究』四、二〇一九）
浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局発行

・『浄土宗全書』一（山喜房仏書林、一九七二）

・『浄土宗全書』二三（山喜房仏書林、一九七二）

浄土宗聖典刊行会編

・『浄土宗聖典』一（浄土宗、一九九四）

浄土宗総合研究所編

・『現代語訳 浄土三部経』（浄土宗出版、二〇一一）

浄土宗大辞典編纂委員会監修、浄土宗大辞典編纂実行委員会編

・宗祖法然上人八百年大遠忌記念『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗、二〇一六）

総本山知恩院布教師発行、知恩院浄土宗学研究所編集委員会編訳

・『法然上人のお言葉——元祖大師御法語——』（二〇一〇）

袖山榮輝

・『全注・全訳 阿弥陀経事典』（鈴木出版、二〇〇八）

高崎直道監修、桂紹隆、斉藤明、下田正弘、末木文美士編

・『仏と浄土——大乘仏典Ⅱ』（シリーズ大乘仏教）五、春秋社、二〇一三）

坪井俊英編

・『法然上人八百年遠忌記念 法然浄土教要文集』（平楽寺書店、二〇〇五）

新作博明

・『チベット語訳阿弥陀経の諸本対照表』（唯称寺仏教文化交流研究、二〇一〇）

（*小野田（二〇〇一）で未使用のウランバートル写本、タワン写本、リタン版、チョネ版を加えた計一三本を利用した校訂。経文の該当箇所が併記対照されており、異説箇所が着色によって把握できる。ネット上で閲覧可（www.yuishoji.org））

西村実則

・『阿弥陀経』（小澤憲珠監修、勝崎裕彦、林田康順編『浄土教の世界』（大正大学出版会、二〇一一）所収）

林田康順

・『法然上人（三部経釈）に説かれる〈選択〉をめぐって』（三康文化研究所『年報』三一、二〇〇〇）

・『法然上人における勝劣・大小・多少相對三義の成立について——「念仏多善根の文」渡来の意義——』（宮林昭彦教授古稀記念論文集 仏教思想の受容と展開）一、山喜房仏書林、二〇〇四）

藤田宏達

・『原始浄土思想の研究』（岩波書店、一九七〇）

・『浄土三部経の研究』（岩波書店、二〇〇七）

・『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』（法蔵館、二〇一一）

・『新訂梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』（法蔵館、二〇一五）

（*一九七五年版には未採録であるが、新たに「悉曇本とサンスクリット断片」の項目が付加されている。中でも中央アジア出土のサンスクリット断片の存在報告（日本に伝来した悉曇本より遡るもの。書体（Early South Turkish-tan Brahmi）に基づいて七、八世紀以前の断片とされる）によって、中央アジアでの『阿弥陀経』の流伝状況が語られる点が注目される。）

藤田宏達、櫻部建

・『無量寿経 阿弥陀経』（『浄土仏教の思想』一、講談社、一九九四）

藤仲孝司、中御門敬教

- ・『インド・チベット浄土教の研究』（起心書房、二〇一八）
佛教大学総合研究所編
 - ・『浄土教典籍目録』（二〇一一）
水谷幸正監修、齊藤舜健訳註
 - ・『傍訳 三部経釈 往生大要抄』（四季社、二〇〇八）
南宏信
 - ・「法然「選択証誠」と「念仏多善根」」（『東山研究紀要』六一、二〇一七）
村上明也、吉田慈順
 - ・『源信撰『阿弥陀経略記』の訳注研究』（法蔵館、二〇二〇）
- キーワード 『阿弥陀経』、浄土三部経、『阿弥陀経釈』、法然、浄土思想